

# 地域の価値づけという実践

－兵庫県美方郡香美町小代区の「日本で最も美しい村」連合加盟をめぐる  
地域と大学との連携・協働のプロセスから－

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))

## Deriving and Attaching Values to an Area:

From the Process of Collaboration between University and Local Society over the Association of “The Most Beautiful Villages in Japan” in Ojiro, Kami Town in Hyogo Prefecture

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

**要旨：**農山村地域をはじめとする中山間地域や地方都市のおかれている状況は、社会経済的に厳しい。一方、大学の役割として地域との連携・協働が重要視されている。そこで本稿では、筆者自身が約10年間関わっている兵庫県美方郡香美町小代区における、「日本で最も美しい村」連合加盟をめぐる地域と大学との連携・協働のプロセスを事例に、地域の価値づけという実践を検証する。大学の社会的役割として「価値の創出」は重要であるが、地域に対するそれは一般的・普遍的、あるいは予定調和的なアプローチでは十分な対応ができない。地域の多様な主体との連携・協働の試行錯誤を重ね、その地域に見合った新たな可能性を切り拓くことが大切である。

**キーワード：**中山間地域 hilly and mountainous areas  
農村地域 rural area  
域学連携 community and academia collaboration  
アクションリサーチ action research

## 1. はじめに

日本全体が人口減少社会に突入した今、農山村地域をはじめとする中山間地域や地方都市の多くがおかれている社会経済的状况は、厳しいと言わざるを得ない状況にある。こうした中、2006年(平成18年)改正に係る教育基本法において、社会貢献が教育及び研究に次ぐ大学の第三の使命として明記された。その中でも、地域連携・地域貢献は重視されている。総務省は、地域づくり活動における地域と大学との連携、すなわち『『域学連携』地域づくり活動』を、「大学生と大学教員が地域の現場に入り、地域の住民やNPO等とともに、地域の課題解決又は地域づくりに継続的に取り組み、地域の活性化及び地域の人材育成に資する活動」(総務省ウェブサイト)とし、そのメリットを図1のようにまとめている。文部科学省による「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」等もこれに大きく関わる。また、「地域」を冠する名称の学部・学科の新設も、今世紀に入り目立っている。

しかし、図1で地域のメリットと大学のメリットが重なり合う部分に含まれるのは、人材育成だけでなかろう。社会経済的に厳しい状況にある地域および大学には、社会の中での存在価値が問われている。したがって、地域と研究・

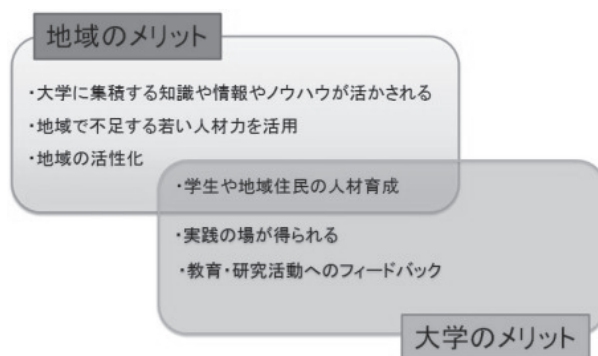


図1 総務省の考える「域学連携」地域づくり活動における地域と大学のメリット

総務省ウェブサイトより転載。

教育機能を有する大学とが連携・協働して地域の価値を明らかにし、どう持続させていくのかを検討することは、両者にとってのメリットとなりうる。また、それらを通じた「学生や地域住民の人材育成」は、より大きな効果を発揮するであろうし、持続可能な人間関係の構築にもつながると考えられる。

そこで本稿では、筆者自身の関わった兵庫県美方郡香美町小代(おじろ)区の「日本で最も美しい村」連合加盟を

めぐる地域と大学との連携・協働のプロセスを事例に、地域の価値づけという実践を検証する。香美町小代区への筆者の関わりは、2008年にさかのぼる。2018年末までに250回以上通っている。ここは筆者にとって、多様な地域の存在様式、地域間連携等のあり方を検討する「地域多様性」という概念（河本、2011）をデザインし深めるフィールドのひとつではあったが、活動は研究よりも教育や社会貢献を重視したものであった。こうした活動はアクションリサーチの実践として位置づけられると考える。

地域づくりに関して、旧建設省建設経済局事業総括研究班室が監修した地域づくり研究会編(1999)や、作野(2006)などは、「守り」と「攻め」という考え方および実践事例を体系的に取りまとめている。本研究では、地域と大学の協働における地域側の論理として、この「守り」と「攻め」という観点を援用した形での整理をおこなう。

## 2. 地域概要

兵庫県美方郡香美町小代区は、兵庫県北部（但馬地方）の鳥取県境に位置する香美町の南部にある地域自治区である（図2）。いわゆる「平成の大合併」前の同区のエリアは、郡名をとって名称を美方町としていた。2005年4月1日に美方郡美方町・村岡町および城崎郡香住町が合併し美



図2 兵庫県における香美町小代区の位置  
(姉妹都市である尼崎市の位置も示している。)

方郡香美町が成立した際、地域自治区名として、住民の要望により旧来の地名である小代の名を復活させた。

同区は、中国山地に端を發し香美町香住区で日本海に注ぐ矢田川の源流部をなす山間地域であり、矢田川およびその支流の谷底平野やその山腹斜面に20以上の集落がある（図3）。2015年の国勢調査によると、世帯数712、人口1,965、高齢化率47.2%（香美町全体では人口18,070、高齢化率36.7%）で、兵庫県内では最も過疎化・高齢化・獣害等の中山間地域問題を顕著に有している地域のひとつである（井上、2007）。また、豪雪地域であり、「兵庫県下の北海道といわれるほどに気候条件が厳しい」（渡辺、1976）。



図3 香美町小代区新屋からみる小代谷の景観

小代という地名は、小さな田を意味する。山腹斜面等に棚田が發達しており、日本の棚田百選のひとつである「うへ山の棚田」を有する。こうした棚田等で農耕牛として用いるため、かつては但馬牛が多く農家で1頭ずつ飼われていた（河野、1934）。現在の但馬牛は食肉用であり、小代とその周辺には子牛の段階まで育てて競りに出す繁殖農家が多く分布している。但馬牛の飼養農家数は減少しているが、同区は後述するように全国の黒毛和牛の繁殖メス牛の99.9%にその血の入っている「田尻」号という名牛を育むなどした、和牛のルーツとも言える地域である。

農業を主産業としてきたが、1970年代以降はサービス業・建設業・製造業の占める割合が大きくなっている（図4）。また、冬季は豪雪のため、生産年齢の男性の多くがかつては酒造などの出稼ぎをおこなっていた（人見、1988；山本、1991）が、2つあるスキー場（おじろスキー場・ミカタスノーパーク）での臨時雇用や、道路改良等に伴う他地域への通勤等に代わりつつある。

観光面では、スキー場のほか、温泉「おじろん」、滝や溪谷、キャンプ場・コテージ村、古代体験の森などに多くの来訪者がある（白石、1995、1997；井上、1998；山口・井上・今村、2003）。また、美方町時代に姉妹都市縁組が結ばれた尼崎市が設置した尼崎市立美方高原自然の家「とちの

き村」にも、小学生等が多く訪れている(田中・矢部, 2006)。特産品には、但馬牛があるほか、美方町時代から温泉水を活用したスッポンおよびチョウザメの養殖がおこなわれている。また、棚田米や、小代区が原産地である在来種の方美わさびや美方大納言小豆、シカやイノシシなどのジビエ、山菜、川魚などがある。

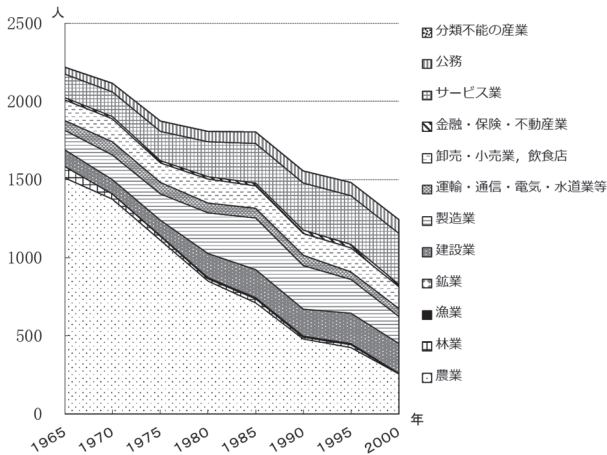


図4 旧美方町(現在の香美町小代区)の産業大分類別就業者数推移  
(各年版の国勢調査により作成。)

### 3. 地域との出会いと初期の活動

筆者は、2007年4月に開学した神戸夙川学院大学<sup>1</sup>の唯一の学部・学科である観光文化学部観光文化学科の教員として、兵庫県に赴任した。担当科目は、1年生前期の「調査研究基礎」、1年生後期から2年生後期にかけて学生が8分野の中から異なる3分野の担当教員を選択するゼミ的科目「調査研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」、3年生のゼミ科目「環境・グリーンツーリズム実践研究Ⅰ・Ⅱ」、4年生のゼミ科目「環境・グリーンツーリズム総合研究Ⅰ・Ⅱ」、全学年が履修できる選択科目「自然地理学」(後に「地理学」と改称)、同じく「自然環境保全論」、3年生以降が履修できる「農村地域活用法」、複数教員で担当する「インターンシップ」等であった。本稿が主に関係するのは3年生以降のゼミ科目である。筆者のゼミは、文化・自然ツーリズムコースの環境・グリーンツーリズム分野として位置付けられていた。3年生から卒業まで所属するゼミの選択は、いずれの学生も2年生後期にゼミ説明会や面談を経て行っていた。

香美町小代区との出会いは、2008年11月に、兵庫県がおこなっていた「小規模集落元気作戦」のモデル集落選定のための職員視察に同行しないかと誘われたことである。視察の際、地域を興味深げに見ていた筆者に対し、県職員が小代観光協会(現在の香美町小代観光協会)に設けられていた小代自然学校受入協議会のアドバイザーとなることを勧めてきた。承諾後、同月のガイド養成講座最終回に参加してまとめのファシリテーションを行い、同年12月

の第1回会議からはほぼ毎月、県職員とともに同協議会の会議に参加した。そこは、自然学校受入れにとどまらず地域づくり全般について話し合う場となった。筆者は、毎月の会合では参加者誰もが発言しやすい雰囲気づくりに務めるとともに、参加型ワークショップによる地域資源の洗い出しや活用法の議論を多くおこなった。

その中で、NICE(日本国際ワークキャンプセンター)の国際ワークキャンプを小代で開催する提案をおこなった。これは、筆者の学生時代からの活動経験と人間関係を活かしたものである。国際ワークキャンプとは、世界各地の人々がどこかの地域に集まり、一定期間滞在しながらボランティア活動に従事するものである。小代では、2009年5月にNICEの職員を交えた説明会を開催した翌日に有志が第1回の国際ワークキャンプの企画書を出し、同年8月には公園の草刈清掃やシャクナゲの手入れ、コテージ村施設周辺の清掃、グラウンドの整備、畑仕事、お盆行事参加(地区奉仕作業)などをワーク内容とする10日間の国際ワークキャンプを実現させた。それ以来、内容を変えながら毎年8月か9月に10~15日間で実施している。筆者の学生がリーダー等として運営に関わらせてもらった回もある。

一方で、大学の1期生が3年生となる2009年4月から、ゼミ活動のフィールドとさせてもらってきた。ゼミでは、特定の地域について五感を使ってじっくり深く学び、地域をみる目を養いたいと考えた。小代では、住民および出身者にお世話になる形で空き家を借りて拠点にし、四季を通じて地域に学ぶ実践的な教育活動を進めてきた。

2009年5月に行った小代での初のフィールドワークでは、小代の地域社会を知るべく、学生とともに無住集落を含むすべての集落を歩いた。そして、学生が「眺めがいい」という理由で気に入った佐坊地区を選定し、夏に世帯動向・農地動向に関する全戸悉皆調査を実施した。そのデータと経験をもとに、秋には集落の未来を考える場を設け、また山間から集落に至る水路の整備に参加するなどした(河本, 2015)。さらに、冬には豪雪地域としてのこの集落の暮らしを知るべく散策や聞き取りを行った。そして翌2010年の7月に再度のワークショップを開催した。学生の意欲は高く、住民との後々に続く密な交流も育むことができたが、小代区の中でも社会的閉鎖性が高く、かつ高齢化率の高い集落であったことから、集落を主体とした形で「攻め」の動きを創出していくのは困難であった。

以上から、2010年度の3年生のゼミは、小代区全域を対象に取り組むことにした。また、あわせて小代自然学校受入協議会の会議において、2010年夏に「日本で最も美しい村」連合に香美町小代区として加盟することを提案した。

### 4. 「日本で最も美しい村」連合加盟の提案

「日本で最も美しい村」連合は、各地の地域資源のこれまでの「守り」と、それらを継承していくための「攻め」を価値づける団体のひとつとして位置付けられる。この連

合は、1982年に設立された「フランスで最も美しい村」連合を範として、北海道美瑛町長の呼びかけで2005年に発足した<sup>2</sup>。2018年10月現在、63地域（29町24村と10の自治体内地域）が加盟認定されている。申請時に、生活の営みにより作られた景観、豊かな自然、昔ながらの祭りや建築物等のうち、2つ以上を地域資源として挙げ、連合はその資源およびそれを活かす活動を評価する。

筆者は、この連合への加盟が、小代におけるこれまでの「守り」を価値づけ「攻め」を創り出す手段としてふさわしいと考え、同連合を小代自然学校受入協議会の会合の場で紹介した。それは、以下のねらいを持っていた。第一に、住民に小代を価値ある地域として再認識してもらい、ここで生活し続けたいという気持ちを強く持ってもらうこと。第二に、自治体内の部分地域であるがゆえに、埋もれがちな地域資源の価値を伝えるための、仕掛けを創る原動力となり得ること。第三に、そのための組織作りを進めたいこと。第四に、「和牛のふるさと小代」の存在を都市住民・訪日外国人等に伝え、食のルーツを持つ里としての食育的価値や山里の暮らしの価値を発信する契機になることである。

この提案は受け入れられ、小代自然学校受入協議会の委員等が、加盟申請に向けて香美町役場の関連部署など各所に相談や働きかけをおこなうこととなった。しかしこの時点で、いくつかの困難が予想された。それは第一に、自治体内の部分地域での申請となるため、誰がどう動くのかが定まらないということである。「日本で最も美しい村」連合に加盟認定されている地域の多くは、町村単位である。その場合は、首長のリーダーシップで加盟申請に向けての動きを進めることができる。しかし、小代の場合はそれが困難である。第二に、それに起因して、香美町長や町議会、町行政の理解をどう得るかにも関係者は頭を悩ますことになった。第三に、活動の財源をどうするか、第四に、地域資源として登録する内容を何にするかも問題となった。

## 5. 加盟認定に至るまでの協働の取り組み

香美町小代区の「日本で最も美しい村」連合への加盟申請に向けた、地域と大学との協働は、地域資源調査、人材育成・広報活動、申請書類の作成の3つに大別できる。

### 5. 1. 地域資源調査

1点目は地域資源調査、具体的には「和牛のふるさと」としての小代の実態調査である。これは2010年度の3年生のゼミ活動として実施した。2010年8月に全畜産農家（すべて和牛繁殖経営）22戸のうち18戸、農協の畜産事務所、元畜産農家、元獣医等を訪ね、綿密な聴き取り調査および文献収集をおこなった。また、無住集落となっている地域をも含む形で、但馬牛の血統や飼い方の歴史も検討した。これらには2つの目的があった。ひとつは、今後の地域づくりの基盤となるデータの収集である。もうひとつは、但馬牛をめぐる人間関係の構築である。後者の背景に

は、これまで畜産関係者と観光・地域づくり関係者との間に接点は少なく、畜産関係者の実情について観光・地域づくり関係者は十分に理解していなかったことがある。また、血縁・地縁の濃い小代において、地元の観光・地域づくり関係者のみで畜産関係者の実態を網羅的に把握することは難しいという実情に、大学が地域と協働することの意義を見出した。

### 5. 2. 人材育成・広報活動

2点目は人材育成・広報活動である。そのひとつとして、ガイド養成が挙げられる。小代を含む香美町は山陰海岸ジオパークの中央部に位置する。当時、2010年10月に同ジオパークが世界ジオパークネットワークの加盟認定を受けたこと、2015年9月に同ジオパークでのAPGN（アジア太平洋ジオパークネットワーク）の5日間にわたるシンポジウムの開催が決まっていたことなどから、山陰海岸ジオパーク推進協議会ではジオパーク内各地でのガイド養成に力を入れていた。小代はガイド養成講座への多数かつ熱心な参加がみられる地域のひとつであったが、受講してもガイド団体が存在せず、ガイドとして活躍する機会がほとんどない状態であったため、新たな組織として山陰海岸ジオパーク小代ファンクラブ（その後、小代ガイドクラブと改称）が立ち上がった。そこではジオパークにおける小代の価値として、滝や溪谷、多雪、地すべり地などの自然景観、「地」に足のついた暮らしが作りだした棚田等の文化景観と食文化、そしてそれらの中で育まれてきた但馬牛などが挙げられ、ジオパークの枠組みに位置づけられた。筆者はそのガイド養成講座の講師を何度か務め、また話し合いや作業にも極力参加してきた。

また、地域の方々とともに、小代区内における「和牛のふるさと」としての価値づくりや「日本で最も美しい村」連合への加盟に向けての機運醸成と周知を図るための場の設定を試みた。まず、2011年2月7日に「但馬牛のさと・おじろシンポジウム」（小代自然学校受入協議会・小代観光協会主催）を開催した。ここでは、小代区にある元研修施設を改装して「オーベルジュ花郷里（はなごうり）」として経営していた有馬温泉旅館「陶泉 御所坊」の主人で国土交通省「観光カリスマ」の金井啓修氏が、地域資源を活かした観光と地域活性化について基調講演を行った。また、筆者のゼミ生が、小代の但馬牛を飼養する畜産農家とその暮らしについて、2010年度の研究成果を報告した。そのうえで、筆者がコーディネーターとなり、JAや畜産関係者、観光協会等を交えてパネルディスカッションをおこなった。図5はその枠組みである。これまで観光や地域づくりという視点ではあまり捉えられてこなかった但馬牛や畜産について、今後のあり方を議論した。

2012年3月18日には、『和牛のふるさと・小代(OJIRO)』未来テーブル～これからの小代を本気で考える会～を、小代自然学校受入協議会を中心とする実行委員会で開催した（香美町小代区自治会・小代観光協会が共催）。ここでは、

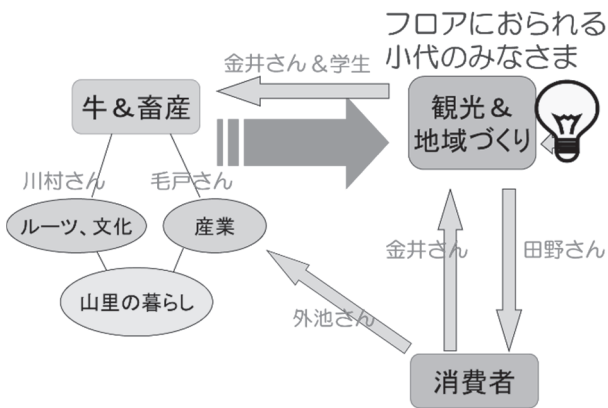


図5 「但馬牛のさと・おじろシンポジウム」当日に使用したシンポジストの関係の見取り図

「小さな町(地域)のまちづくり～『日本で最も美しい村』を活かす～」と題して、鳥取県智頭町長の寺谷誠一郎氏が基調講演をおこなった。これは、当時の小代観光協会長が「日本で最も美しい村」連合にぜひ加わりたいということで、近隣で加盟していた同町に足を運んで実現させたものである。あわせて、「和牛のふるさと」としての小代のシンボルキャラクターのデザイン・名前の募集結果発表および表彰式もおこなった。これは、小代自然学校受入協議会が区内の小中学校・認定こども園を中心に募集していたものである(図6)。名称の「こべ」は、仔牛を指す方言である。その選定過程では、但馬牛を飼養する畜産農家の意見を重視した。また、会場には小代中学校の1年生が「総合的な学習の時間」にまとめた「但馬牛とは」のスライドも掲示された。その後、「外国人向け発信について」、「和牛のふるさとの未来像について」、「小代の特産品について(どう売るか)」という3つの分科会を設け、参加型で議論を深めた。これらの意思決定過程には筆者が、当日の分科会の進行等には2011年度の3年ゼミ生も大きく関わらせてもらった。

これらの場では、小代が山陰海岸ジオパークの一部であることも重視した。ジオパークにおける小代の価値として、自然景観(特に溪谷、滝)、「地」に足の着いた暮らしが創り出した棚田などの景観と食文化、そして但馬牛の3つがあると考え、位置づけた。

小代自然学校受入協議会では、これらに加え、「和牛のふるさと・小代」写真展と銘打ち、2012年7月24日～10月1日を募集期間として「香美町小代の人・牛・自然」がテーマのフォトコンテストも実施した。その目的は、当時のチラシによると「小代区民作品展、但馬牛食まつり等で写真展を開催し、小代区内外の方に小代の美しい景観・魅力のある暮らしを伝え、小代の良さを再認識していただく機会とする。また、小代自然学校受入協議会の委員が選考する数点については、今後の観光PRにも活用する。この機会に今では見ることができない風景や昔の暮らしの様



図6 小代こべちゃん

子が撮影された写真を募集し、後世に残る資料として但馬牛ミニ博物館等での継続的な展示を行う」ことであった。募集期間内に撮影された写真を募集する【おじろの今】部門、家のアルバム等に眠っている昭和以前の写真を募集する【昔なつかしい小代】部門、携帯電話で撮影してFacebookの専用ページへ投稿してもらう【Facebook】部門の3部門を設けた。

### 5. 3. 入会申請書の作成

3点目は、入会申請書の作成である。筆者は、「日本で最も美しい村」連合に対する香美町小代区の登録地域資源として、『和牛のふるさと』として的小代」と、「小代の棚田」を提案した。しかし申請準備の段階で、これに地元有志から「みかた残酷マラソン全国大会」を加えた3資源で加盟申請したいとの声も上がった。筆者は、『和牛のふるさと』として的小代』については小代観光協会に当時勤務していた但馬牛に詳しい職員の助力も得ながら全面的に執筆した。また、他の2つの資源についても加筆修正に携わった。

参考までに、また記録として、入会申請書から3つの登録資源に関する部分を引用する。いずれも「説明」および「地域資源を生かす活動」からなる。

#### 5. 3. 1. 「和牛のふるさと」としての小代

「説明」として以下を記した。

“香美町小代区は、「和牛のふるさと」と自信を持って言える地域です。それは、以下の3つの価値があるからです。

第一に、全国の黒毛和牛の99.9%に、小代で生まれ育った但馬牛の血が流れています。この数字は、2012年2月に、小代観光協会が美方郡和牛育種組合を通じて

社団法人全国和牛登録協会に「田尻」号という牛の血統に関する調査を依頼し、明らかになりました（添付資料参照。筆者加筆：図7）。「田尻」号は、小代の貫田集落の田尻松蔵が生産した牛で、1939年から1958年まで生き、優れた種雄牛として全国の和牛改良の礎を築きました。「田尻」号の誕生に先立つ江戸時代末期には、小代の猪之谷集落の前田周助が、但馬牛の優れた特徴を受け継いでいくための基礎となった「周助蔓」を形づくりしました。蔓（つる）は、似通った形質をもつ優れた血統の雌牛の集団です。小代周辺の険しい山岳地形と厳しい気候風土が、主な谷筋ごとに異なった、質の高い蔓を育みしました。明治初期に起きた但馬牛の絶滅危機を救ったのも、小代の牛です。大型化を目的とした欧米の品種との交配が失敗した際、但馬牛の特徴を色濃く残した純粋種が、小代で最も上流に位置する熱田集落に生存していることがわかり、その後、周助蔓の流れを引く「あつた蔓」となりました。「田尻」号は、この「あつた蔓」直系の1頭です。各地でブランド化されている黒毛和牛は、小代の地と人々が育んだこの偉大なる血統あつてのものと言ってよいのではないのでしょうか。

第二に、小代を含む美方郡の牛は、世界的にもほとんど例のない二重の「閉鎖育種」により、「純血」が保たれています。兵庫県全域で「但馬牛」の名での閉鎖育種が行われている中で、小代を含む美方郡では、この地域だけの閉鎖育種が行われています。その結果、美方郡産の子牛は、競り市において**全国トップクラスの値**で取引されています。そして、各地の肥育農家等にも買われていき、神戸ビーフ・松阪牛など、全国のブランド牛になります。

第三に、小代には「暮らしの中に牛がいる」と言える風景がかるうじて残っています。現在の畜産の主流は、少数の畜産農家が多く頭数を飼う多頭飼育化で、数百頭規模の経営も増えています。そうした中、小代ではまだ、集落の中で10頭以下の規模で牛を飼う農家も各所で見られます。棚田の畔で刈り取った草を中心に、自給飼料100%を維持している農家もあります。「遅れている」とされがちなこうした畜産農家には、目を転じれば、全国的に希少性を増している、<小さいからこそその価値>が見られます。小代の畜産農家（畜主）は、家族での小規模経営だからこそ1頭1頭の牛のことを本当によく理解して世話しているし、牛も飼い主のことをよく知っています。小代では、「よい肉をつくる」だけでなく、その大前提である「よい牛を育む」ことが、毎日の暮らしの中でとても大事にされています。

このように、「和牛のふるさと」として世界に誇れる優れた物語性を持つ小代ですが、残念ながら畜産農家の数は急速に減少しています。以前はほぼ全戸が農耕牛などとして牛を飼養していましたが、高齢化や農業形態の変化等により、現在はわずか21戸となってしまいました。”

「地域資源を生かす活動」には、以下を記した。

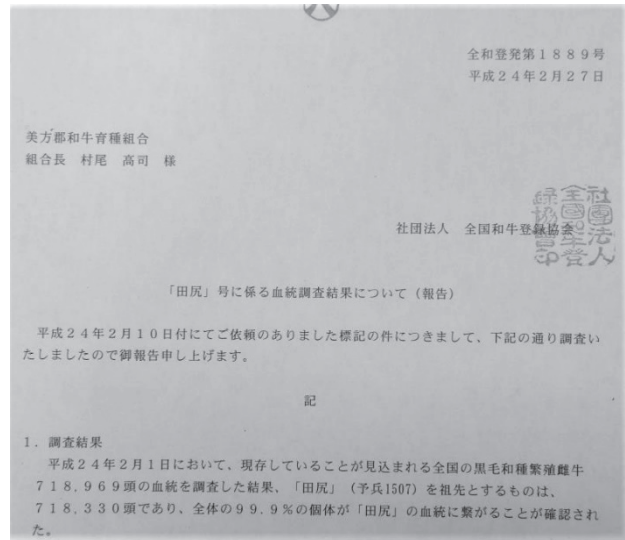


図7 全国和牛登録協会からの報告（一部）

“和牛のふるさと”としての小代の価値は、まだまだあまり知られていません。しかし、旧美方町（現在の香美町小代区と同城。合併時に小代という古い地名を復活させた）では、国道9号線から小代谷に入る交差点に「名牛の里・小代」（2005年の合併前は「名牛の里・美方町」という看板を立てたり、但馬牛の牛肉を販売する店やレストランを各1店舗設けたりしていました。また、水間集落の住民が前田周助の物語を劇として演じるなど、様々な取り組みがありました。小代の畜産農家が育てた牛は、今でも各種品評会で大変高く評価されています。

とはいえ、「和牛のふるさと」としての小代の物語性を生かす活動は、むしろ2005年に3町が合併して香美町となった後に活発化しています。

町としては、2008年から「香美町 山の祭典『但馬牛 食まつり』」を始めました。香美町の小代区・村岡区が毎年交互に開催し、但馬牛のルーツを持つ山里として、その食の魅力と物語性を、主に都市部の方々に楽しんでいただきながらPRするイベントです。また、2009年から始めた「但馬牛ゆったりウォーク」も好評です。紅葉の季節に、起伏に富んだコースをノルディック・ウォークの形で進み、但馬牛のいる風景を味わうイベントです。

外の力を借りた活動も行っています。2009年から神戸夙川学院大学のゼミが小代に関わっており、畜産農家のほぼ全戸で聴き取り調査を実施したり、田尻松蔵氏と「田尻」号に関する子ども向け紙芝居「田尻さんと田尻くんの物語」を作成したりしながら、小代区民と一緒に「和牛のふるさと」としての小代を価値化する取り組みを進めています。さらに、2009年から国際ワークキャンプを毎年受け入れ、飼料用に棚田の畔草刈りをしたり畜産農家を訪問したりすることによって、外国人にも「和牛のふるさと」としての深い物語性を知ってもらえるよう徐々に環境整備を図っています。

これらの取り組みをふまえ、2011年には初めて「但馬牛

のさと・おじろ」シンポジウムを実施し、国交省認定「観光カリスマ」や畜産関係者などを交えて、今後の方向性を模索しました。また、同年にはスキー場のゲレンデを活用した観光牧場「美方高原牧場」や、小代とその周辺の但馬牛ゆかりの品々や古写真等を収集・展示した「但馬牛ミニ博物館」を開設し、案内機能の整備も図っているところで

す。さらに、「和牛のふるさと」であることを地域の誇りとし、ふるさと意識の高揚を図るべく、中学1年生の総合学習で小代の但馬牛をテーマとして取り上げたり、2年生の「トライやるウィーク」で畜産農家を職場体験の場のひとつとしたりしています。また、小代区在住・在勤者を対象に但馬牛の女の子をモチーフとした「ゆるキャラ」の公募をおこない、さらに名称を小代区内の認定こども園・小学校・中学校の子どもたちに考えてもらい、2012年2月には「小代こべ」ちゃんが誕生しました。「こべ」は、小代周辺での子牛の呼び方ですが、近年はあまり使われなくなっていたものです。

インターネット等を活用した情報発信にも努めています。特に2011年12月からは、Facebook上に有志による「スモールイズワンダフル～但馬牛のふるさと・小代」というファンページを設けています。

2012年3月には、小代区民みんなで動きをつくっていくと、『和牛のふるさと・小代』未来テーブル～これからの小代を本気で考える会～を開催しました。満員となった会場では、「日本で最も美しい村連合」に加盟している鳥取県智頭町の町長さんに基調講演をいただき、さらに3つの分科会で徹底議論をして、「和牛のふるさと」である「日本で最も美しい村」としてこれからの小代を形作っていくと、「小」さい「代」表としての小代の価値を伝えていくと確認し合いました。

今後も、「和牛のふるさと」としての小代を、様々な立場の人が手を取り合って継承・発展させていくための仕掛けと仕組みを、積極的に構築していきたいと考えています。”

### 5. 3. 2. 小代の棚田

「説明」は下記のとおりである。

“小代の水田は、ほとんどが棚田です。小代という地名は、小さな田(代)が多いことに由来すると言い伝えられています。

小代の大半は照来(てらぎ)火山の地すべり地で、小代区内の集落のうち18集落が県の棚田保全指定地域となっています。

小代は、葉っぱのような形をしています。その中央を南から北に矢田川が流れており、すべての支流が矢田川に注ぎ込みます。ひとつの谷で小代区というひとつの地域自治区(旧美方町域)、しかもそのすべてが源流域という、地理的まとまりのよい地域です。湧きだした水は、矢田川をはさんで東西の急傾斜地に点在する、棚田の用水に利用さ

れます。かつては日本の山間部の多くで目にする事の出来たふるさとの代名詞ともいえる棚田の風景が、ここには広がっています。

中でも「うへ山の棚田」は、規模はさほど大きくないものの、斜面に畦が独特なカーブを幾重にも描き、前面に眺望が開けていること、休耕田がほとんどなくよく管理されていることなどが評価され、「日本の棚田百選」のひとつに選定されています。”

「地域資源を生かす活動」として以下を記した。

“棚田は、その多面的機能が強く評価され、全国各地で保全活動が進められていますが、過疎化や、農業者の高齢化、鳥獣被害等により、衰退・消滅の危機にあります。こうした中、小代の21集落の棚田では、中山間地域等直接支払制度を活用して、水路掃除・農道の草刈・農地法面の管理・有害鳥獣防止のネット、電気柵設置と地区総出で行い、棚田の保全に取り組んでいます。

中には神水(かんずい)・水間・平野・新屋(にいや)のように、集落営農組合をつくり休耕田・放棄田対策に取り組む活動をしている区もあります。こうした、地に足の着いた日々の活動により地域住民の相互理解や連携が深まり、それが農村文化の継承や、農村の景観保全、集落コミュニティの活性化につながっています。

また、「うへ山の棚田」等では、農作業体験や米の直接販売、交流イベント等を通じて、都市部等の人々に棚田の意義を伝える活動もおこなっています。さらに、実山(さねやま)集落では、獣害防止柵設置を地元住民と外部のボランティアとで行う「獣害レンジャー」などの取り組みも見られます。さらに、世界認定を受けた山陰海岸ジオパークを構成する地域のひとつとして、地すべり地を利用してつくられているこれらの棚田の成因や存在意義の普及にも努めています。”

### 5. 3. 3. みかた残酷マラソン全国大会

「説明」は下記のとおりである。

“2012年に第20回を迎える「みかた残酷マラソン全国大会」は、小代区内の各所を巡る、高低差400mを周回するうねりのあるハードコースを、個人戦(男女別・年齢別)・団体戦(4人1チームの合計タイム)で競う大会です。小代区は氷ノ山後山那岐山国定公園に指定された1000m級の山々に囲まれています。その急傾斜地の自然を利用して、棚田や集落、森林の中の大きなうねりのある坂道走るコースを設定しています。標高差を利用したマラソン大会は、現在では各所で行われていますが、その走りのひとつが「みかた残酷マラソン全国大会」です。

2011年の第19回大会には、過去最多である1955名のランナーと106チームがエントリーし、24kmのコースを走りました。

山岳地域である小代の高低差をプラスに捉えて活用した「残酷」なコースですが、リピーターが62%(第19回大会)と多く、年々参加者が増えています。右記のように、

小代区民とランナーが共にゴールを目指す大会です。”

「地域資源を生かす活動」として以下を記した。

“この大会の特徴のひとつは、小代の住民の参加度が高いことです。小代の年中行事のひとつとして完全に定着しており、多くの小代区民にとって「自分ごと」になっています。

具体的にはまず、大会前から、小学生・中学生を中心に区民が参加者全員に応援メッセージを送り、交流をはかります。

大会の当日は区民総出で、沿道にて手づくりの旗を振り応援をします。13箇所給水ポイントでは、小代区内の21の地区が協力し、それぞれ工夫を凝らした温かい応援もてなしをします。

ゴール会場では地元のボランティアスタッフ・中学生・婦人会が、冷たいトマト、ソーメン、飲み物などを振る舞い、選手の疲れを癒します。ここでも応援メッセージにより結ばれた選手と区民との交流がそここで行われています。

こうした住民参加と、真の意味での「交流」が、この地域資源を活用した大会の持続につながっています。”

#### 5. 4. 加盟認定へ

「日本で最も美しい村」連合への加盟申請のプロセスは、行政や自治会など「守り」の論理を重視する主体を中心に進んだ。申請団体は小代区自治会となり、実質的に作業を進めてきた小代観光協会（補助金受入団体として実質的にその下位組織の形で存在していた小代自然学校受入協議会を含む）などの「攻め」の主体は事務局という位置付けにとどまり、形の上では中心とならなかった。これは、香美町行政や住民の多くにとって、観光協会よりも自治会のほうが地域を代表する組織としてふさわしいと考えられたことによる。

「日本で最も美しい村」連合への加盟の可否は、審査員2名による現地審査を含む加盟認定審査を経て決定される。筆者は現地審査には同行しなかった。その後、2012年9月3日付で小代区自治会に「日本で最も美しい村」連合加盟内定についての通知が届いた。そこでは、「和牛のふるさと」としての小代と、みかた残酷マラソン全国大会の、2つの地域資源が記されていた。「小代の棚田」については、類似の地域資源が全国の加盟村に多いこともあって、「和牛のふるさと」としての小代を含む形が望ましいと判断された。内定通知に記された「資格委員会での審査意見」は、下記のとおりであった。

“地域資源には非常に多様性があり、和牛のふるさととして繁殖農家は松坂・神戸へ和牛を出荷している。小さい規模の牧畜が多く、棚田の畔の草を牛の飼料にしたり、牛堆肥使用など農畜連携の循環型農業が根付いている。地場資源として出された残酷マラソンは、実際に説明を受けると持続的地域競技として地元にしかりと根付いていることが実感できた。

合併した地区だが古い名称である『おじる』に拘っており、地元の熱意は高いため『日本で最も美しい村』連合加盟のための資格基準を満たしていると判断いたしました。

また、懸念事項として地域協議会組織のため行政の支援（保護条例・活動資金の補助）を継続して受けられるかどうか、との意見があったことを申し添えます。

『日本で最も美しい村』連合の地域資源の定義は『人々の生活の営みによって作り出されてきた景観、環境、文化』です。地域資源を保全し、活かしながら、共に『美しい村』運動を盛り上げていきましょう。”

その後、2012年10月4日に宮崎県高原町において開かれた総会での承認を得て、「香美町小代」の名称で正式に「日本で最も美しい村」連合に加盟認定された。

#### 6. 加盟認定後の動き

小代における「日本で最も美しい村」連合加盟をめぐるプロセスと主体の概要は、図8のようにまとめられる。筆者らは小代に対し、当初は観光協会等を中心に関わってきた。その後、それとは別に学生とともに佐坊地区等の住民に直接関わり、地域社会について学ぶ機会を得た。これらの経験を生かし、その後は連合加盟認定を手段とした地域の価値づけを、畜産農家等を交えた多様な主体の協働でおこなった。

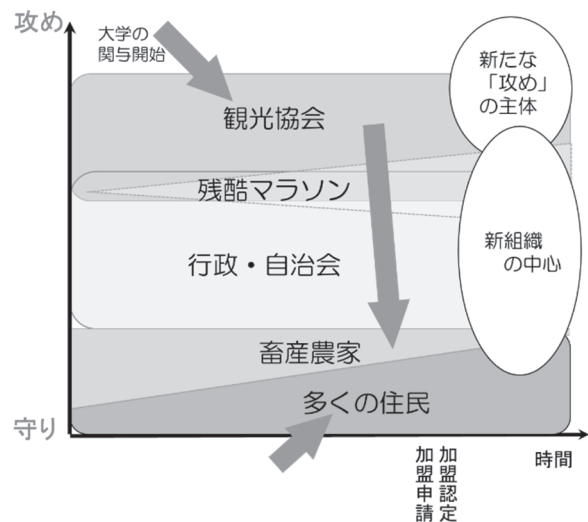


図8 香美町小代区における「日本で最も美しい村」連合加盟をめぐるプロセスと主体

(太い矢印が、大学の関与を示す。)

加盟認定後、小代では行政・自治会を中心に、連合加盟を活かした地域づくりを目的とする組織の形成がゆっくりと進んだ。そして、「日本で最も美しい村香美町小代」というアンブレラ的な新組織が設立された。このように「守り」の主体が申請プロセスにおいて中心的役割を果たしたことで、住民の安心感、納得感が深まった面はある。



一方で、若手の商工業者や観光協会関係者、大学など、加盟認定を活かして「攻め」たい主体は、この体制下でどう動くか戸惑いつつも、「納得のプロセス」の重要性は理解している状態であった。

加盟認定による地域の価値づけは、新たな動きにつながっている。小代区内の観光関連業者が「日本で最も美しい村」の名称やロゴを用いる事例がいくつも生まれた。飲食・宿泊業者の後継 U ターン者らが「美しい村 小代若旦那の会」を結成して「おじろマルシェ」を不定期で開催するようになった。和牛（但馬牛）のふるさとに関する情報の整理・発信が進められ、小代ガイドクラブの活動<sup>3</sup>が活発化した（図 9）。高齢者が地域の新たなスポットとして「添水唐臼小屋<sup>4</sup>」を設置した。うへ山の棚田を若い世代で保全・再生させる「俺たちの武勇田」の活動による棚田米の販売にも、「日本で最も美しい村」の名称が用いられている。小中学校でも「日本で最も美しい村」を意識した活動が行われるようになった。



図 9 小代ガイドクラブのみなさん

このように、住民の地域に対する誇り醸成に寄与したり、地域資源を活かした「攻め」の新たな機運を若手の商工業者等にもたらしたりしたことは、部分的には地域と大学の協働作業がなされた成果と考えられる。

とはいえ、加盟認定に至るプロセスに見られる「守り」主体の動きは、大学の活動（外からの動き）への疑念や反発もあったことと考えられる。また、前述のように観光協会などの「攻め」の団体が地域の代表性を十分に有していないことも一因であろう。さらに、自治体内の 1 地域としての加盟申請のため、首長や議会、同一町内の他地域住民の同意を得る手続きに「守り」の論理が必要とされた面もあると考えられる。実際、筆者も新組織「日本で最も美しい村香美町小代」の初代会長を小代区自治会長と兼任し

た方などから、諸主体間の板挟み状態になって苦しかった旨を聞いている。

他方で、新組織が既存各団体のアンブレラの性格をもったため、会議の出席者の多くが各団体からの代表者となり、人数ばかり多くて機動的な「攻め」がしづらという不満も聞いてきた。そのような中であっても、少しでも住民との意識共有を図ることができるよう、「『日本で最も美しい村 香美町小代』からのお知らせ」を区内に全戸配布したり、独自のフォトコンテストを開催したり、花の植栽や一斉清掃を実施したり、独自財源を確保するべく寄付金を募ったりといった活動がおこなわれてきた<sup>5</sup>。

一部有志は新組織「日本で最も美しい村香美町小代」とは別に 2013 年 5 月に「美しい村小代研究所」を結成し、新組織の動きの邪魔はしないよう注意を払いつつ地域の在り方を考えた活動を続けてきた。住民の笑顔を撮影する「小代笑顔写真プロジェクト」、有機農業の技術を学び研鑽を図る「小代有機農業教室」、小代小学校・小代中学校の児童・生徒の冬季の集団登下校時に融雪用の水が商店街の道路中央から出ているのを自動車運転手に気づかせる「水はね防止キャンペーン」などが挙げられる。諸々あった末に、現在はそのメンバーが「日本で最も美しい村香美町小代」の中心となり、事業を続けている。

また、事務局体制や情報発信力の強化をねらいに香美町地域おこし協力隊の隊員を募集し、2017 年 4 月から 1 名が着任している。筆者も 2018 年 7 月に「日本で最も美しい村香美町小代」のアドバイザーになった。同年 11 月には「日本で最も美しい村」連合の定期再認定審査が行われた。

## 7. おわりに

本稿では、筆者自身が約 10 年間関わっている兵庫県美作郡香美町小代区における、「日本で最も美しい村」連合加盟をめぐる地域と大学との連携・協働のプロセスを事例に、地域の価値づけという実践を検証してきた。実践の成果と課題はここまでの各所で述べてきたが、今後の「地域の価値づけ」に関して 3 つ教訓を記しておきたい。

第一に、大学の社会的役割として「価値の創出」は重要であるが、地域に対するそれは、一般的・普遍的、あるいは予定調和的なアプローチでは十分な対応ができないことも多い。地域の多様な主体との連携・協働の試行錯誤を重ね、その地域に見合った新たな可能性を切り拓くことが大切である。大学側から見て思うように成果があがらないことに、焦ってはいけない。

第二に、地域の価値づけは、あくまでも地域づくりや社会形成の手段であって、目的ではない。このことは関係者間で共有しておきたい。

第三に、大学教員に求められる 4 つの側面、すなわち教育・研究・社会貢献・学務は、なるべく連動させることが望ましい。これらをばらばらにおこなうと、大学教員は時

間・精神的に余裕がなくなるし、地域にまると向き合うことが難しくなる。連動させたほうが大学の総合力が発揮され、地域にとってもよい結果がもたらされる。本事例は、教育・研究・社会貢献を連動させる形で、地域とまさに「協働」してきたプロセスであった。

とはいえ、本事例は大学という組織ではなく教員個人とその学生による地域への関わりであった。また、本事例の「地域」は、地方自治体ではなくその部分地域である。さらに、地域づくりの成果が出るのはまだまだこれからである。したがって、ここでは過度な一般化は避けたい。

なお、本稿の対象地域では、学生のフィールドワークを通じて学生と地域住民と教員がともに変容する経験も積んできた。これについては河本（2019）にまとめたので、あわせて参照されたい。

### 付記

日頃から大変お世話になっております香美町小代区とその周辺の皆様に、心より厚くお礼申し上げます。本研究の骨子は、地域活性学会第5回研究大会（高崎経済大学、2013年7月20日）、および21st Annual Colloquium of the IGU (International Geographical Union) -CSRS (Commission on the Sustainability of Rural Systems) (名古屋大学、2013年8月1日)等で発表しました。

### 注

- 1) 神戸市中央区のポートアイランド西海岸にキャンパスをもつ、観光文化に特化した大学であった。観光系の学部としては日本最大規模で、地域社会との協働を通じた人材育成の取組を数多く創りあげていたが、運営していた学校法人の経営難により2015年に学生募集停止となった。そこで神戸山手大学が、現代社会学部に観光系の学科を新設し、神戸夙川学院大学の全学生と多くの教員、一部の職員を転籍の形で受け入れた。神戸夙川学院大学は廃止となった。
- 2) 「日本で最も美しい村」の運営に深く関わった立場から執筆された杉（2009）によると、同連合は「町村自治体と都市サポーターの理念共有型の当事者連携組織」である。また、「ブランドは外部の消費者から与えられるものではあるが、住民自治が活動の原点たる『日本で最も美しい村』運動では、内部の『求心力』こそブランドの価値の神髄と思われる」とし、同運動こそが「持続可能な地域モデルであると確信している」と述べられている。
- 3) 小代ガイドクラブは、「地元の市民の熱意が本物のガイドを生み出す典型的な実例」（尾池、2016）として、ジオパーク活動推進の立場からも高く評価されている。和牛（但馬牛）のふるさとのストーリーに

ついては、香美町小代観光協会のウェブサイトの特設された「日本で最も美しい村」関連のページや、田中畜産のウェブサイトに掲載されている小代観光協会元職員の藤村美香氏による記事を参照されたい。

- 4) 「そうずからうすごや」と読む。水力を利用し、臼で精米や製粉を行う、昔ながらの装置を設けた小屋である。屋根や外壁には「日本で最も美しい村」の景観を意識して杉皮が用いられている。
- 5) これらの詳細については、香美町小代観光協会のウェブサイトの特設された「日本で最も美しい村」関連のページを参照されたい。

### 引用文献

- 井上寛和（1998）,「兵庫県美方町域の地理研究（第2報）」, 兵庫地理, 43, pp. 10-21.
- 井上寛和（2007）, 地域農業への地誌的アプローチ, 筑波書房.
- 尾池和夫（2016）,「日本ジオパークの教育力とは何か」, 地学雑誌, 125, pp. 785-794.
- 香美町小代観光協会, 日本で最も美しい村 香美町小代, [http://www.ojirokanko.com/ojiro\\_mura/html/](http://www.ojirokanko.com/ojiro_mura/html/), 2019年1月11日最終閲覧.
- 河野正直（1934）,「但馬に於ける牧牛の地理的研究（概報）」, 地学雑誌, 46, pp. 154-169.
- 河本大地（2011）,「ジオツーリズムと地理学発『地域多様性』概念—『ジオ』の視点を持続的地域社会づくりに生かすために—」, 地学雑誌, 120, pp. 775-785.
- 河本大地（2015）,『『限界集落』の教育力—兵庫県美方郡香美町小代区における大学生のフィールドワーク経験から—』; 平野智照編, 手のひらの宇宙 vol.4, あうん社, pp. 159-170.
- 河本大地（2019）,「農山村でのフィールドワークを通じた持続可能な『関係人口』づくりの実践—兵庫県美方郡香美町小代区におけるゼミ活動から卒業生の『嫁入り』まで—」, 経済地理学年報, 65 (掲載予定).
- 作野広和（2006）,「中山間地域における地域問題と集落の対応」, 経済地理学年報, 52, pp. 264-282.
- 白石太良（1995）,「観光開発による過疎山村の活性化—奈良県下北山村と兵庫県美方町—」, 兵庫地理, 40, pp. 35-49.
- 白石太良（1997）,「兵庫県美方町の観光開発への1つの試み—ミニ独立国方式の可能性—」, 兵庫地理, 42, pp. 1-7.
- 杉 一浩（2009）,「地方が蘇る地域ブランド構築—『最も美しい村』運動の紹介—」, 開発工学, 29, pp. 67-73.
- 総務省,「域学連携」地域づくり活動, [http://www.soumu.go.jp/main\\_sosiki/jichi\\_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html](http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/ikigakurenkei.html), 2019年1月11日

最終閲覧.

- 田中畜産, 但馬牛について, <https://tanatiku.com/tajima-ushi>, 2019年1月11日最終閲覧.
- 田中利明・矢部京之助 (2006), 「自然学校における指導補助員の教育的効果について」, 野外教育研究, 10, pp. 49-58.
- 地域づくり研究会編 (1999), 新地域づくり戦略—「守りと攻め」が地域を変える—, ぎょうせい.
- 人見五郎 (1988), 「但馬牛産地における和子牛生産と酒造出稼ぎ」, 農林業問題研究, 24, pp. 144-152.
- 山口 修・井上升二・今村 彰 (2003), 「兵庫県における環境教育を主とした総合学習のための野外活動の場—自然公園と天然記念物—」, 兵庫教育大学研究紀要, 23, pp. 71-80.
- 山本一雄 (1991), 「西但馬地方における酒造出稼ぎの変容」, 立命館地理学, 3, pp. 31-46.
- 渡辺久雄 (1976), 「木地師の一生—兵庫県美方町の場合—」, 論集, 22-3, pp. 119-143.